
アマガミ...新たなる出発

三美スーパースターズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アマガミ…新たなる出発

【Nコード】

N8771Z

【作者名】

三美スーパースターズ

【あらすじ】

9月から、俺はまさかまさかの輝日東という街に移籍を…あ、いや引越しをすることになった。今までは男子校だったから、女子に苛められる心配もなく安心して野球とか勉強とかに打ち込めたんだけれど…。とりあえず、橘さんとか言う人の家に居候することになった。そう言えば、転校先の輝日東高校に野球部はないそうだ。はあ…これから先、どうなるのかなあ。

月あたり4回、毎週1回のペースで投稿することを予定しています。

但し、これはあくまでなので更新ペースがかなり速かったりするときもあります。

1話 移籍（前書き）

初めまして、はじめてアマガミの作品を手がけます直通特急でございます。こんな中途半端な年末の日に投稿することがいいのかどうかはよく分かりませんが、よろしくお願いいたします。

1話 移籍

移籍って言うのは何もスポーツに限ったことだけではない。俺の名前は石井一譽いしいかずよし。高校2年生の7月19日…いわゆる終業式を迎えて帰ってきたら部屋に置かれていたのは俺の家財道具だけだった。

「通信簿貰ってきた…?!」

すると呼び鈴を誰かが押したようだ。急いで俺は玄関に向かった。

「おかえり一譽」

いたのはお袋だった。

「ああただいま…ってこれは!」

「言ってたじゃない。お母さんとお父さん今日から行くって…」

「えっ…そうだったのかあ」

俺の両親は同じ病院で働いていた医師で、このたびその実力が認められて海外にスカウトされたというわけで…これも移籍に値する行動である。

「それでね一譽、明日には引越しの業者さんがお前の荷物を取りに来るから準備しといてね。言ってたわよねこの家も売っちゃうって…」

「確かにそんなこと言ってたかもしれないけど、明日は急じゃ?」

「ごめんね。一瞥には悪いけど、しばらくは他の家の方のお世話になって貰おうって思ってた」

「居候^{いせう}って事？」

「そう一瞥。そう言えば成績は？」

「ああ、学年で150人中36位だったよ。最後の最後も李承？だったさ…」

「スンちゃん？」

「そうそう。最後の最後もスンちゃんだったさ」

ああ、李承？って言うのは俺の大好きな野球選手で、三星ライオンズで今シーズンからプレーしている野球選手である。それはそうとう、俺は両親の血を受け継いでいるのか学校の勉強は教科にも依るが出来るの部類に入ると思う。況してや俺は生粋の鉄道好きだから社会は拔群。数学と物理、それから英語は得意…だけど、化学と国語が大きく足をいつも引く張る。数学はクラストップでも、国語はクラスで下から数えた方が早いときだってあったくらいだ。だけど、語学には自信が少なからずある。俺は韓国語は出来る。お袋の友達に韓国からの研修生がいて仲良くなるうちに教えて貰って言うわけである。そんなことよりも、俺にはもっと苦手なものがあった…、対人関係だ。今の高校の友人は誰でもみんな仲良くしてくれている。だけど、小学校と中学校で俺はそれなりに「いじめ」を受けてきた。成績がまあそれなりに良かったから、嫉^{ねた}まれたのだろうと自分では思っている。特に中学の女子なんて…思い出したくもなかった。これが俺の今の正確に大きく影響していると言っても過言

ではないだろう。

.....

「あのさあ、アンタこんなこともできないの？」

「……」

「ねえ、なんか言ったらどうなのよ!」

「……」

「ねえ!!」

「よしなよ。コイツ、口聞けないんだからさ……」

「そうか。悪かったわね……」

”我慢するんだ…沈黙は金なんだから…それに、馬鹿な奴ほど良く吠えるって言うし”

.....

と言った具合に、とにかく格好のいじめの対象に入っていたのだろう。その所為で未だに俺は女性と、特に恋愛なんてもってのほかだ。今まで通っていた高校も、男子校だったぐらいだ。とはいえども、別に‘女嫌い’と言うわけでは決していないだろうけども、どうも女性と面と向かって話したり、目と目があったりすると背中を冷や汗が流れる。勿論の事だけど、女性から告白されたりしてもなんだか信じる事が出来ない。況してや、何かに陥れられようとしてい

るのではないかと錯覚に陥るほどだ。

おっと、長々と話してしまった。そうだった、親父とお袋が今日から転勤で、俺も別の家のお世話になるんだそうだ。まさかとは思うけど…

「俺の引つ越し先って国内でしょ？」

「当たり前じゃない！。父さんと母さんの共通の友人の家にお世話になって貰うことにしたの。場所は輝日東きびとのね、橘さんって言つもの」
輝日東って言うと俺の住んでるニュータウンからは結構遠くにあることになる。

「橘さんね…わかった。それよりももう時間ないんじゃないの？」

「大丈夫よ、今日は羽田から行くの」

「だからって…急げや」

「一瞥らしいこと言ってくれてありがとう。それじゃあ気をつけてね。何かあったらすぐ連絡するのよ。そうそう、もう少ししたら一瞥のために新しく買ったパソコンが届くはずだから」

「わかった。わるいねえ…」

「大切に使うのよ？」

「うん、勿論だよ」

「それじゃあね。本当にがんばってね」

「お袋と親父もな……」

「ありがとう」

「あ、そうだった」

「何だよ、忘れ物か？」

「一瞥、もし何かあったらいつでも連絡してね」

「な、何を急に？」

「中学の時は中学の時、高校は高校よ。今を楽しく……ね？」

「わ、わかってるよ。なんとかするさ……」

「そう。ならいいわ、それじゃあね」

「おう！」

そう言うとお袋はとうとうタクシーに再び乗り込んだ。これから早速羽田に行くんだろう。さてと、俺も早いところ段ボールで荷物まとめないといけないなあ……。

「こんにちわあ、宅配便です！」

「ああ。パソコンですか？」

「はい、石井一瞥様でよろしいですか？」

「ええ」

「ここにサインを…」

サインをすると俺は荷物を受け取った。折角で申し訳ないんだけど、明後日もう一度橘さんの家に送れないかと聞いてみたところ追加で3000円払えばいいとのことだったのでそうすることにした。そうそう、両親からの仕送りは月あたり俺には15万円、橘さんの家には25万円の計40万円なんだそうだ。ゆとりだなあ…。そうそう、俺家電というか電子機器にはこだわりがあつてスマートフォンは三星サムソンのものを、パソコンはLenovoのThinkCentreサムソンを使っている。ゆくゆくはThinkPad tabletサムソンが欲しいと思っている。まあそんなことはどうでもいいや。とりあえず俺は2時間ほど時間をかけて引越しの準備を済ませた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「それじゃあよろしくお願いします…」

俺は制服姿で引越しの業者さんによろしくと伝えると一人で駅に向かった。そうそう俺は前の高校では野球部に入っていた。だけど、この転校のせいで俺は野球をすることが出来なくなってしまったのだ。というのも高野連では転校した場合は一年間公式戦に出ることが出来なくなってしまうのだ。それでもまあ、野球部に入ろうかなって思ったりもしたんだけど、そもそも俺の転校先の輝日東高校は野球部がない。故にバットとかも宝の持ち腐れってわけだ。

「さてと、それじゃあ行くか。にしても暑いなあ…」

今日もいい天気だ真夏の空は雲一つ無い快晴。俺の出発を祝ってくれているのかなあ。今まで長らく使っていたこの駅とも何かとも今日でお別れと思うと少し寂しかった。特急列車の折り戸式のドアが閉まると危うく泣きそうになってしまった。とにかく俺は指定された座席に腰を下ろした。

「ふう…」

スマートフォンにはメールが入っていたようだ。お袋から何でも輝日東駅に橘さんの家の子供が迎えに来てくれるんだそうだ。年は同じ年の男の子と、一つしたの女の子なんだそうで、仲はいいとのこと。無駄ではないけども何とも言えない情報だ。輝日東まではかなり距離があると言ったがこの特急列車を使っても軽く1時間半はある。

”さてと、少し寝るか…”

俺はあっという間に夢の中に落ちた。

気がつくと列車の

「間もなく輝日東、輝日東でございます。降り口は左側でございます、ご乗車ありがとうございます。Ladies and gentlemen・We will soon make a brief stop at Kibito・Thank you for using」

というアナウンスが聞こえた。

「輝日東、輝日東でございます」

ホームに降り立ち、今度は駅員さんのアナウンスを聞き流しながら改札口に向かった。

「あ、いに。あの人じゃない？」

「ん？。どれだ美也^{みや}？」

「ほらあの制服と帽子姿の」

「ああ…確かにあの人みたいだな」

言い忘れていたが俺が前にいた高校は伝統的に学帽があるところだった。実はこの学帽…お気に入りだったりもする。俺もそんな事をしているうちに橘さんと思われる二人を見つけた。

「初めまして。僕は橘純一です。んで、こっちが妹の…」

「橘美也です、よろしくお願いします」

「ああ…俺は石井一響です。これから暫くの間お世話になります。よろしくお願いします」

「ところで僕、何て呼べばいいかな？」

「うーん、石井でいいよ。俺もなんかさあ、堅苦しいからもうこんな感じの会話でいいかな？。馴れ馴れしいと思っただったら敬語でこれからも話すけど…」

「いいいいいよ。僕も折角あつたから仲良くしたいって思ってたし、それに高校一緒だからさ」

「私とにいは同じ高校なんです。だから石井さんとも同じなんですよ」

「に、にいに？」

「あつ、ごめんなさい！！。お兄ちゃんのことです」

「そ、そう。まあよろしくね、二人とも」

俺は二人に挨拶をすると、早速家まで連れて行ってくれた。この、橘の妹さんはどうやら好感を持つことが出来そうな性格の女の子だ。とは言っても、やっぱりこうやって一緒に家まで向かうとなると、緊張してあんまり会話をすることも出来ない。

「石井先輩？」

「ん…え、え？」

「だ、大丈夫ですか？。なにかきになることでも？」

「い、いや…そんなことはないよ。大丈夫大丈夫…」

「そ、そうですか…」

”この石井先輩ってどうしたんだろう？。みゃーの方が年下なのに、おかしいくらい腰が低いって言うか…怯えてて？”

ここの妹の美也ちゃんとか言っただけ…。そういえば、久しぶりに女性の名前を覚えた気がする。男子校に通っていたんだから当然か。この子は信用しても良さそうな気がしないわけでもない。橘と話をしている限りでは、橘自身はいいやつだなんて言うのが俺の第一印象だしな。だからと言う訳じゃないけども、彼女も信用して良いのかもしれない。けども、どうやって話しかければいいかさえ分らない。

”もし変なこと聞いたら…二度と口きいてもらえなくなるかもしれないし…”

こんな不安に駆り立てられている内に、とうとう橘の家に着いた。これからしばらくは、この家のお世話になるようだ。

”ふう…着いた…か”

自分が与えられた部屋に入ると段ボールとパソコンが入った箱が大切そうに置かれていた。早速それらを部屋に自分の好きなように配置して、ほっと一息ついた。

「ふう…」

部屋でそうやって静かに息を吐きながら、部屋の床の上に腰掛けた。妹さんにはどうやら、あんまり言い印象は残してもらえてないようだ。とは言っても早速俺はパソコンなんかの準備を始めることにした。すると…ドアを誰かがノックしてきた。

「はい、どうぞ？」

そう言うと、部屋には美也さん…が入ってきた。

「し、失礼します」

「えっと…何か？」

「その、引越しの時は慌ただしくて言えなかったんですけど。今日から、ここでインターネットを使っているのだと」

「そう！。いやぁ助かるよお。どうも…」

「はい。あと…」

「な、何か？。もしかして、お金とか？」

「いえいえ！！。そんなことじゃなくて…その…石井さんはどうして美也にあんまり話しかけてくれなかったのになって」

「ん？」

「なんだかさつきここに来るときも、私が話しかけたらなんだか怖い気づいてたような気がして…」

「まあね…俺さ、中学の時に女子に苛められてね。それ以来、女性と話すときにかなり抵抗を感じるようになったんだよ」

「そうだったんですか…それで私も…」

「まあね。でも、君とだったら大丈夫そうかな…って思うんだけど、大丈夫かな？」

俺は、結構ドキドキしながらもそう訊いてみた。後輩とは言えども女性となると俺は決まってこんな感じになってしまう。

「も、勿論ですよ！。安心してください、美也はそんな人じゃありませんから！」

「はは、な、なら良かったよ。これからもよろしくね……」

「はい！」

「そうかい…良かったよ。もう口きいて貰えないかなって思ってたからさ」

「大丈夫ですよ。石井先輩！」

久しぶりに年が近い女の子と話をした気がその時はした…。

1話 移籍（後書き）

いかがでしたでしょうか。ご意見ご感想、お待ちしております。

2話 80%

俺は橘さんの家にお世話になり、しかも図々しくネットまでやらせてもらえることになった。まあ仕送りの値段的には余裕がかなりあるから橘さんの親父さんも、お母さんも認めてくれたんだろう。というか、俺にももう少し支援をして欲しいと言ったところが心情だ。ようやく橘とも、妹さんともまあある程度の話ぐらいなら出来るようになってきた。でも、何とか普通に町に出て女性と会話する勇氣なんてまだまだと言ったところである。

それからいつも通りの夏休みを過ごしあと数日でそれが終わるという頃、自分たちのもとへある人が尋ねてきた。

「こんにちは。橘君」

「こ、こんにちは。高橋先生」

「さて、今日は前もって連絡しておいたんだけど…上がって大丈夫？」

「はい。今石井呼んでくるんで、おゝい美也、先生を案内しておいて」

「はあい！」

「じゃあ僕は石井を」

「ありがとう」

その頃俺はというとまだ眠っていた。実は昨日夜遅くに大リーグを見ていたから眠くて眠くて仕方がないのだ。勿論、今日は俺のために新しくお世話になる輝日東高校から自分の担任の先生が家庭訪問に来ると言うこともすっかり忘れていた。やらかしたな…俺。

「おゝい！！。石井、先生来たぞぉ！」

「ううん…って、もうそんな時間か！！」

「早く来てくれな」

「わ、わかった」

着替え、洗顔、歯磨きを3分で片付けて俺は急いで一階の客間に向かった。

「お、遅くなつてすみません」

「いいのよ。さああなたも座つて」

「はい…」

俺の隣には橘の兄妹が同じように座っている。

「それじゃあ。改めて初めまして、私が9月から君の担任になる高橋摩耶はしまやです。よろしくね」

「どうも…自分が石井一響です…ふう」

「ううん、男の子なんだつたらもつとシャキツとしなさい！」

「すみません、昨日は遅くまで野球見てたんで眠くて…ふわぁ」

「もう、学校が始まったあなたのことも橘君同様ビシバシ指導してあげないとね」

「ええっ！」

「すみません、本当に…」

「まあ今日は大目に見てあげるわ。それじゃあ今から色々と聞いたこともあるから…」

それから大体30分くらいか俺と高橋先生は色々と前の学校のこととこっちでの生活について、それからアルバイトのことなんかを話した。そうそう、この学校、アルバイトが認められているんだそうだ。俺もやってみたいものがあるから不安には多少思っていたのだが、これで安心して出来るようだぞ…。俺がやりたがっているのはスーパーの魚屋のアルバイトだ。元々魚好きだし、前に住んでいたニュータウンでもやっていたから大丈夫だと思う。稼いだお金の一部をバッテリーセンター代に回せば…うん、なかなかいい資産運用になるだろう。

「さてと、それじゃあまた新学期に会いましょう、橘君、石井君」

「はい」

「わかりました…」

そう言葉を残して、高橋先生は去っていった。さてと、俺も起きる

か…。時計の針は10時前を指そうとしていた。高橋先生も随分朝早くに来たもんだなあ。

「どうして、高橋先生だっけ？…あんなに朝早くに来たんだ？」

「まあ彼氏もいないからねえ、朝暇なんじゃないかな？」

「あらあ…なるほどお…さて、俺はもう一眠りするよ」

「そうか、それじゃあ僕と美也はなるべく邪魔しない方がいいかな？」

「おお、助かるわあ…それじゃあ、おやすみい…」

俺はそう橋に告げると、再び自室に戻り、更に布団の中に潜り込んだ。

それから大体1時間後に俺の自転車がこの家にやってきた。

「随分と頑丈そうだな…」

「ホントだねいに。みゃーじゃとてもじゃないけど漕げないよ」

「そうか？。まあ二人乗りなら余裕だと思うよ？」

橋家の兄妹のそれぞれの第一声はそうだった。確かにそうだろう。俺は変なところに途轍とてつもない拘こたわりがあって、自転車は実用車を使っている。何てったってねえ、これなら重たい荷物を楽々積めるし、トレーニングも出来るからね。

「そういえば…輝日東高校って自転車いいの？」

そう俺が訊くと二人は微妙な反応をする。

「ま、まあ大丈夫だけど…」

「石井先輩。輝日東高校は山の上にあるんだよ？。こんなこと言っているのか分からないけど、多分その自転車じゃあ…」

無理と言いたいようだ。まあ俺は登山電車じゃないし、ケーブルカーでもないからそれなりに厳しいものがあるのだろう。どれどれ、下見がてらこの町を少々散歩してみることにしよう。

「ちょっと出かけてくるよ」

「僕は行かなくても平気？」

「ああ。わかんなかったら連絡する。ところでさあ…」

「ん？」

「この辺にバッティングセンターあるか？」

「ああ、それならここをまっすぐ行って4番目の角を左に行けばあるよ。何でもこの辺では硬球を打つことが出来る唯一の店なんだってさあ」

俺はビックリした。まさか俺がやりたいことを叶えてくれるバッティングセンター、要は硬球が打てるところがこんな近くにあるということにだ。俺は早速荷物の中からバットを引っ張り出してくると

それもって出発した…。

「近くに公園があるのかぁ…それにしても暑いなぁ」

今日は気温が35度まで上がるんだそうだ。熱中症には気をつけなくちな。いやぁ、それにしても…

「香苗ちゃん、あづい〜」

「ほら桜井。しっかりしなよ!」

「うゝ、こんな日に学校行かなくちゃいけないなんて信じられない
ゝ!」

「もう。早くしないと置いてくぞぉ」

「ええ、香苗ちゃんったらひどいよぉ〜」

という会話をしている人達を横に見た。どうやら制服から見て輝日東高校の人達のようにだ。まあ、後で俺の正体は分かることだし、とりあえずは挨拶も何もしなくて大丈夫だろう。いやいや、失礼しました。自分には挨拶出来るほどの勇気なんてあるはずありませんでした。

「よいしょっと」

「うわぁ…あの人の乗ってる自転車見るからに古そうだね」

「そうだね。でも、頑丈そうだよね」

「あ、あの人輝日東高校行くのかなあ？」

「まさかあ、あんな坂道登って…行ってる!!」

何とかこれぐらいならなりそうだな。さすがに毎朝これは勘弁だけだね。でもまあこの坂道を毎日上り下りしてたらとんでもない位の筋力はずきそうだけでも…。あゝあ、俺が登山電車だったらよかったのになあなんて言ってる場合じゃないぞ。この坂道緩い勾配が連続してるから休みが取れない。一気に学校まで行くことにしよう。

「ねっ、ねえ香苗ちゃん。あの人…登ってるね」

「桜井、追っかけてみる？」

「うん!!」

その二人は俺を追いかけているのが分かった。言い忘れてたけど俺の自転車にはバックミラーがついている。だからこの時俺は誰かは知らないけど輝日東高校の制服を着ている以上止まるわけにはいかなかった。やれやれ、これじゃあ本当に…

「登山電車だよ」

俺はそう呟きながら坂道を登っていった。

それはまさに地獄だった。学校に着いたときは本当に死にそうだったよ。さてと学校までがどんなもんか分かったから、折り返すとするか…。俺は今度は楽な感じがした。だって下りは勝手に自転車の運転が出来るからである。でも昔から上りよりも下りの方がきついと入ったものだ。油断大敵って訳だな…。

俺は下つているときにぜえぜえとしている後ろから追いかけてきたのである。女子達とすれ違った。

「あ、あれ?!」

「あの人ももう上り終わったのかよ!。確か新学期から転入生が来るって噂があつたけどあの人のかなあ?」

「そうかもね。見たことない顔の人だし…」

この人達が紛れもない桜井梨穂子さんと伊藤香苗さんであることは言うまでもないだろう…。

3話 将来の夢

さつき出会った人達がまさか橋の友人であつたことを俺は知るはずもなく、俺はといえば自転車を快調に漕いで例のバッティングセンターに到着した。さてと、早速練習をするとしよう。とりあえず一番高い5000円で20回の券を購入した。多分今日はこれを使い切ってしまうだろう。

「はっ…はっ…はっ…」

俺がバッティングゲージに入ると外を走る女子の姿があつた。見たところ汗だくだ。まあこの暑さなら必然とも見て取れるが、髪は短くて黙々と走っている。体の引き締まり具合からして水泳部とか陸上部なのかなあ。おっと、俺も練習練習っと。

キーン！！…キーン！！…キーン！！…

金属バットというのは音も醍醐味の一つであると俺は考えている。いい音がすればボールは遠くへ飛んでいく。だから目標は力キーンといわゆる漫画に出てくるような音を再現することだ。このバットは買った直後はなかなか自分に合っていないような感じのものだった。と言うのも、グリップエンドが邪魔だったのだ。その後、フレアグリップになるようにパッドを買ってきたり、グリップテープを貼り替えたりして、ようやく自分のものにすることが出来た。

「おお…」

後ろを振り向くとなぜかジャージ姿の橘と妹の…なんて呼べばいいのかなあ、まあ美也ちゃんにしておこう。まあその二人がいた。言

い忘れてた、あくまでジャージ姿なのは兄だけで妹は普段着だ。面倒だからここで統一しておくことにしよう、これからは兄は橘で妹は美也ちゃんで良さそうだな。

「二人ともどうしたんだ？」

「にいにがどうしてもって…」

「打つのか？。硬球は初めての人には相当痛いと思うけど？」

「大丈夫大丈夫。美也、僕の運動神経なら大丈夫だと思うだろ？」

美也ちゃんはどことなく不安そうに

「にいに、気をつけてね」

と言い返した。俺は本当はダメなんだけどネットの裏って言うかボールが当たるマットの後ろから橘の打撃を見てやることにした。

「一番遅いので行くぞ」

「わかった」

ここのバッティングセンターはいわゆる新型の構造をしていて、画面の選手の投球に合わせてボールが出てくるという仕組みになっている。一応はドーム方になっているようだけど、そもも勿論窓から見られるというわけだ。何より嬉しいのは流れている音楽が野球の応援歌であること。俺は、横浜大洋と大阪近鉄のやつが好きで好きで、曲が流れ始めると一気にやる気というか…こう体の中を何かが駆け抜ける気がして打ちまくれるというわけだ。

コン！

橘は初球を意外にも打ち返した。

「くう」

「だから痛いって言ったのに、ほら換わってやるから後ろで見てろ！」

「す、すまない、後ろで見させて貰うよ」

俺は横浜大洋の球団歌が流れている中、打席に立った。いつもは120キロぐらいを打っているけど、80キロなんて久しぶりの遅さだ。

”大洋ホエールズかあ…”

気合いを入れて臨んだ打席。そうそう、打撃フォームにも李選手のフォームを取り入れてるんですよ。

「凄いなあ…」

まあ伊達に野球やってなかったですからね。これぐらいならどつて事はない…

「おつと!!」

というわけでもないですけど…。すると後ろで美也ちゃんが誰かと話しているのを見かけた。見たところさっきのランニングをしてい

たジャージ姿の女子のようだ。話してる口調からして、おそらく輝日東の人なのだろう。あれ？。よく見たら輝日東のジャージじゃないか、うっかりしてたな。

「逢ちゃん、こんな暑いのによく走ってるね。美也、感心しちゃうよ」

「今日でプールの工事も終わるから明日からまた泳げるんだけど。体作っておかないといけないから」

「えらいね」

「そんなことないよ…」

俺達は丁度打撃が終わって中に戻ろうとした。俺はついでに橘に訊いてみることにした。

「なあ橘」

「どうかしたの？」

「あの…美也ちゃんと話してる子分かる？」

「ああ。逢ちゃんだよ」

「逢ちゃん？」

「七咲逢ちゃんって言って美也と同じクラスなんだ」

「へえ…じゃあ１年生なんだ」

「うん。僕も少し前に知り合ったんだけどね、森島先輩にプールに覗きに連れて行かされたときに怒られちゃったのが初めての対面だったんだ」

何だか森島先輩って言う人に違和感を覚えながらも

「ほ、ほう…」

と俺は答えた。要するに美也ちゃんの知り合いというわけだ。こりゃあ自己紹介する必要があるのかな？。ということは初めて出来る美也ちゃん以外の輝日東高校での後輩という訳か。

「あ、先輩」

「久しぶり。暑いのに頑張ってるんだね」

「くすっ」

「どうしたの？。いきなり笑って」

「いえ、何だか先輩がそんな姿でこんなところに美也ちゃんと一緒にいるなんてちょっと意外で…」

「ひ、酷いなあ。僕だってたまにはこういうところで体を動かしたりするさ」

「にししっ、お兄ちゃんさっきバットにボールが当たっただけでかなり痛がってたよね？」

「こ、こら美也。余計なことを…」

「くすつ…ん？」

するとその…七咲さんという女子は俺を見て、その後橘に

「先輩、そちらの方は？」

と訊いた。因みに俺は、バットのグリップの取れかかったテープを握って手遊びをしていた。

「ああ、紹介するよ。今度僕の家で生活することになった。石井一撃って言うんだ」

「よ、よろしく…」

「そうなんですか。七咲逢です。美也ちゃんとは同じクラスで…」

「そうですか…石井先輩はどうして美也ちゃん達の家にな？」

「えっと、俺の両親と橘さんの両親とは共通の友人なんだ。それで俺の両親は今度海外行っちゃったからさ…」

「え？。石井さんの両親って何してるんですか？」

そうだったな。美也ちゃんとか橘とかにはまだ話していなかったっけ。ついでだから教えておくことにしよう。

「ああ…まだ言ってなかったか。俺の両親は共に医師なんだよ。親父が外科医、母親が小児科医だったかな？。研究するんだかかなん

だから今回は遠くに行っちゃったんだよ」

三人とも啞然とした顔つきだった。そりゃあまあこんな事突然言われてもビックリだろうな。俺も未だに信じられないんだから…。

「す、凄いんですね。先輩のご両親って」

「まあ俺でもよくわかんないけどね」

「石井は後を継ぐのか？」

「多分継がないと思うよ？。いやあ…そんな事はないと思うよ。俺が興味あるのは製鉄と鉄道だからね」

製鉄は鉄道と関連もしてるけど…製造ラインを工場見学の時に見て感動したからで、これなら楽しいかもしれない、幼いときに思ってた職業なのだ。鉄道…まあ自分の将来の夢は運転士だけど、それがダメだったら製鉄でもいいなって思ってる。

「い、意外だなあ随分と…」

「よく言われるよ。まあ自分の好きなことやった方が楽しいだろう？。大体俺不器用だからさ…メスなんか持てないって」

「そ、それはそうかもしれないですけど…先輩って何だか面白い人ですね」

「そう…なのかな？」

「はい！」

橘兄妹もそうだと言いたいような顔をしている。まあ、俺ってそんなもんなのかなあ。

七咲さんという人と出会った。なんというか後輩にしては随分クールというか、冷たさを感じた。そう言う年頃とでも言えば、それだけのことなのかもしれないが俺にとっては随分それが如実に表れていた期がした。まあいいだろう。根は悪いやつじゃないというのが俺の第一印象である。それどころか、初対面から先輩と俺の事を読んでくれた、歴とした後輩だ。大切にしていけないとな。でも、そんな事を今は言える立場に俺はいないのかもしれないけど…。

「石井さん」

「ん？」

「逢ちゃんはどうでした？」

「どうって…そうだねえ。クールな印象を受けた…かな」

「やっぱりそうですか。でも、みゃーも最初はそう思いましたから大丈夫ですよ。逢ちゃんはとってもいい子です」

「どんな風に？」

「両親が仕事で遅くなるときには料理をしたり弟さんの面倒を見たり…」

「弟がいるのか？」

「はい」

「へえー。七咲さんって偉いんだね。俺は一人っ子だからそう言うのよく分からないけど、人の面倒を見るって言うのは並大抵の事じゃないらしいからね」

「そうですよね。にいにもそれぐらい頑張って貰わないと」

「ええっ!？。僕はちゃんと美也のことを大切に思ってるよ」

「そう言われるって事はそう思われてないって事じゃないのかなあ？」

「い、石井まで…そ、そんなことは…」

「につししし…」

橘も可哀想になあ。妹にこんな風にされていたら、面目丸つぶれだろうに。

帰り道、俺達は公園の前を通りかかった。二人が言うにはここは小さい頃からよく遊んでいた場所なんだそうで、思い出のあるところなんだそうだ。確かにニュータウンにもそういうところはあったし、俺にも今も思い出の場所はある。俺の住んでいたニュータウンには、ここまで来るときに乗ってきた鉄道の車庫があって、よく遊びに観に行ったものだ。実用車のスタンド立てて止めると俺達は公園の中に入っていた。

「滑り台か…」

「石井にはまだ言ってなかったけどさ。この滑り台って昔からあってさ、幼馴染みの梨穂子ってやつとよく遊んでたんだ」

「へえ。その子も輝日東高校なの？」

「うん。僕とは違うクラスなんだけどね」

すると後ろの方からなにやら橘を呼ぶ声がした。

「あ、じゅんいちー!!」

「お、よあ!!。ほら石井、彼女が梨穂子さ」

振り向くとそこにはなにやら今朝方見かけた顔が…

「「あ!」」

俺とその梨穂子さんとか言う人は同時にそう声を上げた。おやつという顔をしながら、橘は黙って俺達の事を見ている。勿論美也ちゃんもだ。

「あなた。今朝自転車で輝日東まで坂登ってた人でしょ?。それも凄いスピードで」

「知り合いなのか石井？」

「知り合いって言うか…今朝学校に自転車で登りに行ったときに何度かすれ違ったりした人なんだよ」

「初めまして。私、桜井梨穂子。純一とは幼馴染みで同じ高校に通

つてるんだあ」

桜井さんは、ありがたいことに自発的に自己紹介をしてくれた。

「俺は石井一譽です。今度、ここに越してきて…橘のお世話になっています」

「じゃあ、あなたが純一の家に居候しに来た人なの？」

「ま、まあ…そういうことになりますね…」

「梨穂子！。それじゃ石井があんまりだろ！。石井は両親が海外に行っちゃってるから、一時的に身を寄せてるだけなんだよ」

「そ、そうなの？」

「ええ。俺の両親は医者なんで…海外にちょっと…」

「へえ！すごいねえ。じゃあ今度私も診て貰っていいかな？」

「はあ…」

初対面なのに、この人は本当にのんびりしているというかまったりしているというかぼけーっとしているというか。まあそれが良いところなのかもしれないけども…。見たところ、警戒する必要はあんまり無いかもしれないな。

「それじゃあまたね」

「おう。またな…」

それから30分後、4人で公園で遊んだ後、夕日の方に向かって桜井さんは去っていった。かつこつけて言ってる訳じゃない。今日の晩ご飯が楽しみ〜とかなんとか言っていたし。

「桜井さんか。のんびりしてる人だったな」

「あはは。梨穂子は昔からあんな感じなんだよ」

「へえ…」

「梨穂ちゃんは、料理がとっても上手なんですよ。茶道部に入っていて、去年の創設祭では甘酒を出して貰ったんです」

「創設祭？」

俺はその後創設祭というのがなんなのかと言うことを兄妹から聞いた。早い話が学園祭のことなんだそうだ。俺が前にいた学校では…といっても俺は一回しか学園祭を経験してないけども、偶然練習試合の人重なっているんな人に応援されたい思い出がある。この学校でもそれが出来たらいいな…なんて思ったりもしたいけど、野球部がないんじゃないやあどうしようもない。折角ファーストミットもあるのになあ…。

.....

”石井先輩って、なんだか体格に合わない性格な人だったなあ…”

.....

何はともあれ、今日はいろんな人に出会った。新学期が待ち遠しい
と言いたいけど、憂鬱だなあ…。

4話 Shi-su

翌日はお生憎様、大雨だ。雷もゴロゴロとしている。おとなしく部屋でパソコンをやっていると俺の部屋のドアがノックされた。

「はい？」

「石井、またまた紹介したい人がいるから下に降りてもらえないか？。いいものが待ってるぞ」

橘の頼みを俺が断ることは出来ない。況してやいいものがあるだつて…なんだろうか。

「おおお！」

目の前には俺の大好物である寿司がたくさん置かれていた。まあ軽く5人前ぐらいはありそうだぞ。桜井さんは食いしん坊だつて橘が言っただけけれど、寿司となつちやあ俺も黙ってるわけにはいかねえ…。

「気に入ってくれたか？」

「ん？」

後ろを振り向くと本当にツケ場にいなそうな若い男の姿が…あれ？。この人若すぎるぞ。

「ははは。初めまして、俺は梅原正吉^{つめはらせいきち}。大将の親友さ」

「そうなのか…俺は石井一鬢。よろしくな。俺寿司大好きなんだよ」

「気に入ってくれてなによりだよ。今日は親父がサービスしてくれるからお代は…大将に任せてくれ」

「おいおい。勝手に僕を…」

「ところで梅原。さっきから大将大将って…橘のことか？」

「そうそう。前からずっとそう呼んでるんだ」

「なるほど…」

「ははは。さてと、俺も食べるとしようか」

それから俺達三人は談笑を交えながら寿司を頂いた。いやあ…海が近いだけあって新鮮そのものでとても美味い。ニュータウンだとこっちはいかなかったなあ…あって小僧寿しだったから。

「ところでさ」

「ん？」

「石井はお宝本^{たかほん}には興味はあるか？」

「お宝本？。なんだそれ？」

「いわゆる…こっぴうやつだよ」

すると梅原は俺にお宝本と名乗る本を見せてきた。おおおお…こり

やあいい。ああ、わるいけど女は苦手でも、こういうのはやっぱりその…男の子ですからねえ。自然と顔が

「へっ…」

と呟きながらにやけてしまう。そりゃあわかりますよ、そりゃあこ
ういうのがどれだけいいかって言うのは。

「その顔だと気に入ってくれたみたいだな」

「当たり前じゃないか。しかし凄いなあ…こりゃあ高レベルだぞ」

「ははは。それじゃあお前も俺達の仲間だな」

「そうか…いやあ、楽しい高校生活が送れそうだよ」

「「「ははは！」「」「」

”むう。またにいにたちエツチな本の話してる。全くもう、最近
は隠し場所も巧妙になってきてるし…みゃー参っちゃうよ…”

「それで、石井はどこにそう言うのは隠してるんだ？」

「外付けのハードディスクに残してるよ。基本的にはこういう本を
スキャナーで写して、それを保存してるって感じかな。直接サイト
から取ってくるときもあるしね。こうすれば場所とらないし、パソ
コンにはログインするときパスワードもかけてるから安全でしょ？」

「おお。そりゃあ、新しくいいアイデアだな。やり方教えてく
れないか？」

「いいよ。それじゃあ手始めに、橘のでやってやるよ」

” まずい。にいにもパソコン持つてるから、このままじゃ…”

美也ちゃんは一人で外から盗み聞きをしながらそう考えていた．．．確かにまあ、この年頃の女の子だったら自分の兄貴がそんな事してるの知ったら相当ショックだろうしな。でもまあ、お互いに人間だから欲求には逆らうことなんて出来ない。俺は橘と梅原に保存の方法を教えようとして、美也ちゃんはそれを必死に阻止しようとする。

「おおお。橘の部屋は意外と普通だな」

「石井は何を考えてたんだよ」

「えっ？。そうだなあ…お宝本が散乱してるとか…」

「それはないよ。美也が全部没収しちゃったり、勝手に片付けちゃうよ」

「ははは。そうかそうか…さてと、それじゃあパソコンを貸してくれ」

「いいよ…ん？」

「どうしたんだ？」

「つかないんだよ。パソコンが…」

橘が慌てているのを

「え!？」

美也ちゃんには焦りが見える。残念だったな、俺こういう修羅場に離れてるからな。1年長く生きているだけのことはあった気がする。

「ああ…それもそうか」

「大将ならそっちの方が似合ってるな」

「も、もう…ううう」

俺達がほっと一息していると、梅原はあることに気がついた。

「そういえば、石井の部屋ってどうなってるんだ？」

「え？」

「ああ、そういえば。僕も美也もまだ入ったことないな」

「そ、それじゃあ、おいでよ」

俺は三人を自室に案内した。俺の部屋は前々から言っているが、パソコンとプリンターとスマートフォン、それから備え付けのクーラー以外は何もない。あ、そうだった。この間教科書を買ったから、パソコンのデスクの脇にもう一つ小さい勉強机とスタンドを買ったんだ。椅子はキヤスター付きのパソコンのやつと兼用だ。椅子を丁度90度回転すると、勉強机とパソコンのデスクが切り替わるように俺は配置している。まあ、駅のみどりの窓口をイメージしていると言えいいのだろうか。あれはマルス^{機械}端末と客とのカウンタ―が丁度90度の位置関係にあるから…。

「す、凄くスッキリしてるな…」

「これなんか凄いなあ。超機能的じゃねーか！」

「まあね。後は…その布団だけかな？」

そう言つて俺は部屋の角に畳まれている布団を指さす。

「い、石井さんって多分ですけど、これなら女の子にモテるんじゃないですか？」

「俺が?!」

「ええ。こんなに部屋が綺麗なんですから…」

「ははは。そうだったらいいんだけどね…でも、女の子は苦手だからさ…」

「そうでしたね」

「そうなのか？」

” そうだった。梅原にはまだ俺の事情をちゃんと説明してなかったな。後でしっかりと教えてやらなくちゃあ ”

俺は複雑な心境の中、そう心の中で呟いた…。

5話 会議

雨もだいぶ収まった。今日は梅原はここに泊まっていくんだそう
だ。というのも今夜は橘さん両親が共に旅行に出かけてしまい、ま
ともに一週間帰ってこない。行先は、ドイツのベルリンなんだそう
だ。俺はドイツなんかよりもなあ…韓国に行きたいなって思ったり
している。俺は野球好きだからこの季節だったらナイターを観に行
きたい。メジャーリーグは別に、観ようと思えば衛星放送でいつで
も見る事が出来るからそこまで…いや、でも待てよ。やっぱり野
球ならどこでもいいや。アメリカだろうと、韓国だろうと、台湾だ
ろうと、キューバ、メキシコ、ドミニカ、パナマと全部観に行っ
てみたい。でもやっぱり韓国の野球が一番観てみたいな、韓国でプレ
ーする李承？選手を思い浮かべながら…。

「石井君、どうかしたの？」

「あ、いえいえ…何も…」

と言うわけで、俺は今客間に橘と梅原、それから今度からクラスメ
ートになる棚町薫さんたなましかあると、田中恵子さんたなか けいこと一緒に話を交わしている。
と言っても、俺は基本的にこういうときは黙りこくってしまう。中
学以来、こういう経験はないから久しぶりで、そして怖じ気づい
ちやっ言葉が出なくなってしまうのだ。今さっきみたいな田中さん
とみたいな会話は問題ないんだけどね。

そもそも、どうして俺がこういう目に遭っているかという。さ
っき俺が梅原に俺の事情を説明したことから全てが始まった。

.....

「ふうん、なるほど」

梅原は納得した顔をしてくれた。幸いなことだった。

「石井先輩にはそんな過去があっただんですね。それじゃあ確かに、みゃーとかにも話しかけにくくなっちゃいますよね」

「そうなんだよね。中学の時にそう言う目に遭ったから、高校も男子校に行こうって決めてたし、だけどこの転校だろ？。まあ、今まで通りの生活を続けられ俺は問題ないんだけどね」

俺の放った一言に、美也ちゃんは疑問を感じたようだ。

「今まで通りっていうのは？」

「俺中学の時、女子と会話をしたのは1年生の夏休み前が最後なんだよ。それ以来は、相手が何を言っても俺は黙ってたし、何も頼んだりはしなかったんだ。勿論、男子とは良く会話してたんだけどね」

俺がそう言っていると梅原が突然

「ダメだダメだ〜!!」

と俺を一喝した。

「お、おい!?」

「ど、どうしたんだ梅原?!」

「どうしたの梅ちゃん？」

俺達3人はあつけにとられて、少し固まってしまった。

「石井」

「な、何だよ」

「お前は本当にそう思っているのか？」

「ど、どういことだよ？」

「さっきお前がお宝本を呼んでいたときの顔はどうだったんだ？」

「どうだったって…それはねえ」

不意に顔がにやけてしまった。どうやら俺のこの顔を梅原はまじまじと見ていたようだ。

「その顔で女が苦手とは言わせねーぜ！。これから特訓だー！」

「と、特訓って…」

というわけで、たまたまそこに田中さんと棚町さんが通りかかって現在に至るというわけだ。とは言っても

「アンタ、名前なんて言うの？」

「石井…一譽…です」

「ふうん、越してきたの？」

「は、はい……」

「私は棚町薫って言うの、それでこっちが恵子ね」

「田中恵子です。よ、よろしくね」

「ど、どうも……」

・・・・・・・・・・・・・・・・

それからともなく、沈黙のまま5分くらいが経過した。

「くう~~~~!!。耐えられない!!」

突然、棚町さんが発狂したようにそう叫んだ。橘がさっき言っていた話だと、彼女は中学時代：ああ橘同じ中学だったんだそうだ。よくも悪くも色々と暴れていたんだそうで「輝日東の核弾頭」と呼ばれたいたらしい。確かに、こういった雰囲気には5分と耐えられないところを見ると分からなくもない。俺はこういうのは中学の時の4人班だとかでなれていたから、どうってことはない。にしても中学のことを未だに覚えているなんて、いやあ人間ってなかなか凄いもんだなあ。

その時だった。2階から、がたとと言う音が聞こえた。多分、俺のパソコンの台に置いてあった写真が写真立てと一緒に落ちてしまったんだろう。

「石井のか？」

沈黙をぶち破るかのように、橘がそう俺に呟いた。

「ああ、多分ね。直してくるよ」

そう言っただけは一人部屋を出て行った。写真を落ちないように、もうマットレスと布団を床に敷いてその上に例の写真を置いて部屋に戻ると、中からヒソヒソ声が聞こえていた。

「ねえ、梅原君」

「なんだい田中さん」

「あの石井君って、凄い寡黙な人なの？」

「いや…過去のトラウマにとらわれてるんだ」

「トラウマ…ねえ、なんなのよそれ？」

「中学の時に女子に苛められたんだってさ。だから、女性と会話をしたりするのがとっても億劫って言うかその…精神的にかなりきついみたいなんだ」

「そういうことだったの、ねえ純」

「ん？」

「石井君…もう石井でいいかな？。あの子、恋愛したことあると思う？」

「ないんじゃないかな。高校は今まで男子校だったし、況してやあんな状態じゃとてもじゃないけど…」

「ないよ」

俺は部屋の戸を開けながらそう言った。棚町さんと田中さんははじめて俺が自発的に喋ったことに対して驚いている。座布団の上にあぐらをかいて座ると俺は更にこう続けた。

「お察しの通り。俺は生まれてこのかた恋愛なんてしたことないよ。それどころか、こうやって女子を前にするとなんも言えなくなっちゃうほどなんだからね。怖くて話しかけられないんだ」

久しぶりに女性に向かってそう言い切った。なかなか勇気のいることだったと自分では思っている。

「あ…す、すいません…ついつい」

「ようやく言ってくれたわね」

「棚町…さん？」

すると彼女は突然立ち上がって俺の前にやってきた。じーっと見つめてくるもんだから、俺は瞬間的に顔を逸らす。

「アンタ、私が怖いのか？」

「そ、そういうことなのかな？」

「それじゃあ、もし恵子がこうしても？」

「か、薫!」

「うん。多分そうなんだと思うよ」

俺は無意識のうちに顔を逸らすだけでなくて、10センチくらい後ろに下がっていた。男性なら普通な反応なのかもしれないが、今の俺ならもっと過剰にそれが働いてしまうはずだ。正直なところ、早くこれを終えて部屋でゆっくりしたいところである。

「ふう。こりゃあかなり重症だなあ」

梅原がそうため息をつきながら言った。確かにそうなのかもしれない。でもこれは苛められた人にしか分からないものである。

「と、とにかく。これだけはしばらく治りそうもないんだ。ごめんね…」

「謝ることもないと思うんだけど…」

「す、すいません。前のところでもいっつもこうだったから」

俺と田中さんのやりとりを聞いていて棚町さんは何かをその時ひらめいたようだった。

「そうだわ!。石井の恐怖心をなくすようにみんなで協力しましょう?」

「恐怖心をなくす?」

「とゆーわけで、今日はここまでよ」

時計の針は、もうすぐ11時を指そうとしていた。通りで眠たいわけだ。

「あ、そうだったわ。石井、アンタの部屋見せてちょうだいよ」

突然の質問に俺はまたまた驚いた。

「部屋…を？」

「薫、石井の部屋は色々凄いぞ…」

橘がそう言っただけで何とか気を紛らわせようとするが、余計にそれが棚町さんを刺激してしまい

「そう言われたら余計に見たくなかったわ。行きましょ、恵子！」

「うん!!」

田中さんまでも行く気にさせてしまった。

「ここね？」

「そっだよ」

「それじゃあお邪魔します…っ」

何度も言うが俺の部屋にはパソコンと勉強机以外は何もない。勿論布団とマットレスなどはあるが…。

「た、確かに凄いわね」

「石井君ってとってもきれいだ好きなんだ」

「そういうわけじゃないけど。今は何もないし…」

「確かに純一が凄いつて言ってたのもこれなら無理はないわね。意外と面白いのねアンタって」

「そう…なの？」

久しぶりだな…こんなに女子と長い時間一緒に会話したのは…。

それから20分くらい経って辺りがまた静かになってきた頃に…

「うん。それじゃあアンタ達。またね」

「みんな、おやすみ…」

そう言葉を残して二人は家を去っていった。やれやれ、俺達はどうやら全員同じクラスらしいから新学期から波乱な生活を迎えることになるそうだなこりゃ…。

6話 初日 part 1

どうも俺が勘違いをしていたらしい。今この輝日東高校には確かに硬式野球部はないそうだが、それに準じる同好会があると言うことだそうだ。どうも輝日東高校、今はサッカーに重きが置かれているんだそうだが、数年ほど前まで細々と輝日東高校硬式野球部は存在していたんだそうだ。確かに高野連の過去のデータで確認してみたところ、確かに輝日東高校に野球部があったことは明白になっている。

”これは、入るしかないな”

そう思いながら、パソコンの画面を眺めていた。そうそう、タブレットはやっぱり三星のことにしようかなって最近は考えている。何てったって、ライオンスの親会社ですから……。まあそれはさておき、今日は夏休み最終日高橋先生はこの間来たとき予習復習はしておけと言っていたが宿題は俺の場合転入生だからないんだそう。何ともまあありがたい話である。更に更にだ、高野連のホームページによれば過程の都合でやむを得ず転校した場合には高校野球の出場権は剥奪されずに、そのまま新しい学校で保持されるとのことだそうだ。ということとはだ、このまま行けば今まで通り野球を続けることが出来るかもしれないと言うことだ。これは俺にとって一つの救いの光であった。憂鬱だった明日から始まる新学期が少しだけ、わくわくする気分になることが出来た気がした。

「にしても今日は暑いなあ」

クーラーをつけていても、外から太陽光が入ってくる。もしこれでクーラーが故障したら一大事だっただろう。パソコンは冬場は暖か

いが、夏は熱くて仕方がないのだ。

「今はいつて大丈夫かな？」

「なんだ？」

「ちょっと頼みがあるんだ…」

橘がその時、俺の部屋に入ってきた。見ると数学の教科書と参考書を持っていた。

「その、宿題を手伝ってくれないかな？」

「それをかあ？」

「うん。なかなか難しくて」

「ちょっと見せてくれないかな？」

「ああ、うん」

そう言っただけ俺は橘から参考書を受け取った。俺の前使っていた教科書とは違っようだ。

「いいよ、これならやっておいてやるよ。何ページから何ページまでなの？」

「えっと、70ページから85ページまでの問題なんだ」

「わかった。それじゃあ少ししたら持って行くから…」でもこれ提出

用じゃないの？」

「大丈夫、黒板で解くような感じだから」

「なるほど…まあいいよ」

「感謝するよ」。それじゃああとでね」

「うん」

そう言っていると橘はまた自室に戻っていった。どうやら、他のお仕事はまだまだたくさん残っているようだ。

「さてと、やるか」

そう俺は呟くと問題に取りかかった。そう言えば言い忘れていたけども、数学に関しては大学の内容まで俺はもうある程度やっている。これは前いた高校の同級生に天才的な奴がいて、そいつ等とつるんでいるうちに…ああ、彼等も俺と同じで鉄道にかなり興味がある子達でしたから…というわけで、微分形式だとか行基本変形だとか、普通の高校生が知らないようなことまで俺はもうやっている。

”早速問題か…なにになに

‘ 問、次の関数について、 x の値が $(\)$ 内に示されたように変化しているときの平均変化率を求めよ、’

か…数？レベルの問題だな”

そんな事を思いつつ、ひとまず解き進めた…。

あれから一晩が経過して、新学期の朝を迎えた。昨日橘はかなり感謝をしていたようだ。どうやら彼も宿題を全て終えることが出来たんだそうだ。そういえば彼、数学は得意な方なんだそうだがどうして昨日俺に頼んだのかと聞いたところ、時間がなかったからだとのことだそうだ。昨日宿題を全て片付けたとは言っても、今日提出するのは日本史だけだそうだ。ところで、この学校の日本史はあの高橋先生が教えているんだそうで、今は明治維新辺りを学習しているんだそうだ。

「それでしかも？。1限目が日本史と言うことは？」

「そ。摩耶ちゃんの授業ってことよ！」

「そろそろその言い方やめておけよ。怒られるぞ？」

「ははは。大丈夫大丈夫」

今日は橘は美也ちゃんと仲良く歩いている。だから、その後ろから俺と梅原でくだらない雑談を交わしながら学校への坂道を登っていた。

「まだ制服は届いてないのか？」

「ああ。採寸したのがついこの前だったからね、あと一週間はかかるんだってさ」

「ふ〜ん。あの制服や遅いからなあ」

「そうなのか？」

「おう。遅いことで定評があるって感じか？」

「随分とまあ悪い定評だな」

「「ははは」」

「ところでさ」

「ああ、どうしたんだ？」

不意に梅原俺の身なりについて質問をしてきた。

「その帽子って言うのも前の学校のやつか？」

「そそ。俺の学校古いところでさ、学帽が昔からあって任意で着用出来たんだ。こういうの俺被ってみたくてさ、一年の時に買って以来ずっと登下校の時に被ってたんだよ」

「へー、学ランに学帽とはあ今となっちゃあ古くさいもんだけどな」

「まあね…おい、急がないとまずくないか？」

「ん？。おおっと、もうこんな時間か、急ごう石井」

「おう！」

「ちっ、道理で大将達が速く歩いて行くわけだ」

俺達は残暑厳しい坂道を、汗をかきながら駆け上って行った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ねえねえ、ひびきちゃん。あの梅原君と一緒にいる子誰だか分かるかしら？」

「うーん、知らないわ。初めて見る顔ね。制服も違うみたいだし……転校生じゃない？」

「むむむ。それは調べる価値アリね」

「こらはるか……でも、確かに気になるわね」

「早速休み時間に橘君と梅原君に聞いてみましょう！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

辛うじて俺達はセーフだった。教室に入った途端に、チャイムが学校中に響き渡ったから……まるで、発車ベルが鳴ってから、駆け込み乗車をするような感じだ。先に着いていた、橘は俺達にどうかしたのかと尋ねてくる始末である。

「ま、まあな」

「石井と話してたらついつい」

「そ、そういうところだな……いけね！」

「ん、どうかしたのか？」

「初日は職員室に來いって高橋先生から言われてたんだ。また後でな」

「おお…ん？」

「ところで、職員室ってどっちだ？」

よくあるようなドジを踏みつつ、俺は職員室に急いだ。中に入ると高橋先生が若干怒ったような顔をしていた。

「もう！。遅いわよ！」

「すいません。教室に最初行っちゃって…」

「全く。ところで、制服はまだ届いていないの？」

「ええ。もう少しかかるみたいです」

「まあ、あそこは遅いからねえ…というわけで行きましょうか？」

「も、もうですか？」

「あら。何か不服かしら？」

「いや、まあ冷たい麦茶とか」

「な、あるわけないでしょ…！！」

笑いながら怒るところ辺り、前の学校の担任の先生と同じような間隔で妙な親近感が湧いてきた。と言っても、前の学校の先生は男だ

っただけだね…。

それから数分後、俺は再び教室に戻った。

「え〜。みんな、二学期が今日からスタートします。それで、今日からこのクラスと一緒に勉強することになりました。転校生を紹介します」

「えっと、初めまして…ああ先生」

「何かしら？」

黒板に俺の名前をこの時先生は書いてくれたのだが、ちょっとした些細なミスに気がついた。

「俺の名前の誉は、旧字体の誉です」

「あら！！。ごめんなさい」

「ふう…というわけで、二学期からお世話になることになりました。石井一譽って言います。夏休み中にこっちに越してきてきました…」

「特技は何ですか？」

梅原がにやつきながらそう質問してきた。

「こら梅原君！」

「えっと…特技というか、前の学校では硬式野球をやっていました。ここの学校にも同好会があるとのことだそうなのでそこに入ろうと

思っています。まあ、どうぞよろしくお願いします」

軽い拍手で俺は迎えられた。まさにプロ野球選手がトレードで移籍して、最初の春のキャンプで挨拶をして拍手をされたと云ったところだろうか。

「さてと、それじゃあ石井君には田中さんの後ろの席に座って貰おうかしら？」

「わかりました」

どうやら橘たちとも近い位置にとの高橋先生の人道的支援のようだ。ありがたいことである、況してやこれから冬に向けて寒くなるから、冬場は太陽の光のお陰で暖かい生活を送ることが出来そうだ。

それから数分後、早速授業が始まった。

「さてと、それじゃあ早速で悪いんだけど。石井君」

「はい？」

「教科書の237ページの2番から呼んでいってくれるかしら？」

「わかりました」

「立って読んでいてね」

「はあ……」

言われるがままに俺は教科書を開いて音読を始めた。

それから朝の1、2限というタイトな時間を過ごした後、早速やってきた休み時間というわけで早速俺の前には梅原と橘がやってきた。

「さっきの自己紹介、焦るじゃないか」

「へへっ。まあ気にするな」

「まあな」

「石井はああいうのにもうまく対応出来るんだな」

「うん。前の学校でもそうやってふざけてたからね」

「ところで、大将と石井」

「「ん？」」

俺達と同じ様に聞き返すと、梅原が徐おもむろにとある一冊の本をちらつかせてきた。

「兄貴から何とかやっとな借りてこられたんだ」

「おおおお。いいねえ……」

「石井、お前こっぴうのは大丈夫なのか？」

「甘いものは別腹……みたいなものかな？。橘さんはこっぴうのは苦手で？」

「ええっ?!。僕はその…好きです」

「だろだろ?。放課後に鑑賞会と行こうや」

「あ、ごめん。その時間は同好会に行かなくちゃいけないんだ」

「あちゃあ。それは惜しいなあ…なら待っててやるよ」

「ええっ?。悪いよ…そんなことさせちゃあ」

「いいっていいって」

「そうかあ?」

「おう!。大將はどうするんだい?」

「この間石井の野球やってるところを僕も見たから、今日も見てみたいし…待ってるよ」

何という素晴らしい友人を俺は持ったことか、新学期早々泣けてきそうになると言っただころだ。

「わるいなあ…」

俺達がそんな会話をしていると、誰かが俺達の教室にやってきたようだった…。

7話 初日 part 2 (前書き)

本日は、2話投稿することが出来ました。

7話 初日 part 2

15分休み、俺は屋上でとある女子の先輩から質問というか尋問を受けていた…。

・・・・・・・・・・・・・・・・

それは先ほど教室で雑談を交わしていた時のことだった。

「ねえ橘君！」

3年生らしき人が俺達の教室に入ってきたのだ。おかしなことに回りの男子生徒達はみんな、ドキドキしているというか、どうしてここに来たのかという疑念を浮かべているようである。

「あ、も、森島先輩!!」

そのとき俺は

” ああ、この人が森島先輩って言うんだ…”

と思うぐらいであつた。すると、その森島先輩の視線は俺に向けられた。すると、突然その人は俺の服を掴んだ。

「ちょ、ちょっと!!」

「森島先輩!。石井が何か？」

「ちょっと借りていくわね!!」

「え、ええ…」

”ええええええええええ！”

俺は心の中で心底そう思った。それから俺は、もう一人の女子の先輩にあつた後に屋上に連れて行かれたというわけだ…。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふん。石井君って言うんだ」

「はい…」

この森島先輩というのは、森島もりしまはるか先輩のことで、この学校で一番モテる女子だそうで…いわゆるマドンナである。確かにこれなら俺が前にいた高校でも余裕で一位を獲得することが出来るだろう。いやまあ、俺の前の学校男子校だったしな…。

「ごめんね。はるかっつていつも、こんな調子なの」

「ああ、そうなんですか…」

「ところで石井君大丈夫？。さっきから、汗ばっかりかいてるけど」

「いや、その…あ、暑くて」

「ごめんなさいね。もうすぐ終わると思うから」

「はあ…」

”むむむ。ひびきちゃんと楽しそうだわ…”

鉄道の影響で、はるかつて呼ばれると、どうしても関空特急の方が先に浮かんでしまう。まあそんな事この学校で言ったりしたら、俺は男子から社会的に抹殺されてしまう可能性もあるから…伏せておこう。ああ、今俺にそうフォローするかのよう^{つかはらひびき}に言い返してきてくれたのは、3年生で森島先輩と同じクラスの塚原響先輩だ。女子水泳部の部長をしていて、成績は優秀なんだとか。だが、そんな先輩にもコンプレックスがあるようだ。俺はまあ別に気にしないけど、確か…夏休みにバッキングセンターであつた七咲さんも水泳部だった事を記憶している。そもそもって、橘は覗きの常習犯なんだとか…あいつもなかなかやるなあ。

「ところで石井君、朝、学校来るとき橘君達と一緒にだったわよね？」

「ええ…まあ色々と言ひありで」

「ふん…教えてよ」

「えっ!？」

訳ありつて言えば、たいていの人は諦めてくれるものなのだが…森島先輩はそうもいかないようだ。

「いや、その…俺の母親と橘の母親が昔から友人だったようで、今俺の両親は海外に行っちゃってるんで、その間、俺は橘の家に居候させて貰ってるんです」

「へへ。なんだか凄いわあ!!。私もやってみたいなあ」

この人、橘が言っていたとおりで確かに天然だ。こりゃあ、輝日東高校の男子生徒を虜にする、二つ目の大きな理由だろう。俺だってドキツとしてしまう。だからといって俺の心境は

”こんなに素敵な人を彼女に出来たら嬉しいなあ…まあ俺には高嶺の花もいいところだけでも…。そんなことより、早く終わってくれないとかなあ。そろそろ痙攣が…”

早いうちにこういうことには^{けり}梟をつけないと、禁断症状というか体の拒否反応が作動してしまう。具体的には、痙攣だったり酷いときは失神したりする。

「こ、これからよろしくお願いします。まだこの学校には今日来たばっかなんで…」

「よろしくね。学帽くん」

「えっ?!」

「梅原くんと今朝一緒に歩いていたのって君でしょ?」

「ええ…あれは前の学校のもので」

「ふゝん。今度機会があったら見せて」

「はあ…」

「ごめんね石井君。はるかっていつつもこんな感じだけど…まあ、何かあったらいつでも言ってるね。さあはるか。行くわよ!」

「ええ。もうちょっとだけえ…」

「ダメ。石井君が困惑しちゃってるでしょ？」

そう言う二人は、俺を屋上に残して去っていった。

”ほお…。ようやく終わったか、ああ怖かったなあ…。あ、手、震えてるな”

どうやら、辛うじてセーフだったようだ。暑いし、俺も教室に戻ることにしよう…。

教室に戻ると、早速橘と梅原が俺の前にやってきた。

「どうだった石井。森島先輩は？」

「ああ、確かに美人だったね。だけど…ほら」

「ん？。どうしたんだ石井、手震えてるぞ？」

「もうすぐ収まると思うけど…俺、ああやって連れて行かれたりすると本当にこんな風になるんだ。拒否反応が出ちゃうんだよ…」

「…」

二人も俺の重大な問題にようやく気がついてくれたようだった。そう、俺は知らず知らずのうちに女性と会話をするのも、目線を会わせるのも、近づくことも出来ないようになってしまったようなのである。

「あら？。石井君、大丈夫？」

「え？」

振り向くと別の女子の姿があった。身長は俺より低くて、ロングヘアの…どうやらこのクラスの生徒らしい。

「初めまして。このクラスのクラス委員をしている絢辻詞よ？。石井君、よろしくね」

「ああ…うん。こちらこそ、よろしくお願いします。石井一響って言います」

「え？…う、うん」

”何で石井君。私に敬語を使うのかしら？”

「と、ところで石井君、カバンが大きいのは分かるんだけどこれだと歩くときに邪魔になっちゃうからどうかしておいてもらえる？」

「あああ。す、すみません。どうかしておきます…」

「うん…そうして…ちょうだいね？」

「はい。本当にすみませんでした」

「い、いいよ。今度から気をつけてくれれば…」

俺はどうも謝るときも過剰になってしまうらしい。これじゃあ相手

に不審がられるのも当然ちゃあ当然なわけだ。だけでも、簡単にこれを治すことは多分できないと思う。そうそう、カバンが大きいのは勿論野球道具を入れてるからだ。どうやら同好会なわけで、元々は野球部があつた学校だから部室も一応はあるらしいが、部じゃないから使えない。つまり毎日持って帰って持ってつてを繰り返す必要があると言つこと。

「悪いな…今の俺だとこれが精一杯なんだ」

「まあそつ気を落とすな石井。俺達はいつでも応援してるぞ。な、大将？」

「うん。ゆつくり時間をかけていけばいいさ」

「ありがとう。今日は同好会の時間に何とかお前さん達を驚かすことが出来るようにするよ」

「「…?」「」

俺の言っていることがまだよく分かってもらえていなかったようだった。

それからあつという間に一日が経過した。昼は三人で学食に向かい腹ごしらえをした。その後は午後の授業を眠気を堪えつつ受けた後、放課後を迎えた。

「本当にいいのか？」

「いいつてことよ」

「僕も大丈夫だよ」

「そつか…」

俺は二人を連れて野球同好会のところに向かった。見たところ会員は… 8名のようだ。

「失礼します。今日から転校してきた石井って言います。是非とも入れて貰いたくて…」

すると、会員の人達は俺の事をとっても嬉しい、かなりのラブコールを送ってくれた。どうやらこの同好会は今の2年生が中心となつて結成されたものである。俺が入って丁度9人になるからギリギリ試合をすることも可能なんだそうだ。まあとりあえず練習着に着替えて、俺もキャッチボールを始めた。どうやら他の部活との兼ね合いもあって、毎週月曜と木曜のみの活動とのことだそうだ。その代わり活動日が少ない分、月木は3時から6時半までの3時間半を、このグラウンドを独占して野球をすることが出来るんだそうである。硬式野球は危険を伴うスポーツであるのは知っているが、これだけ言いグラウンドを3時間半も独占出来るとは何て幸せなんだろうか。因みに、この学校は水曜日だけが8限のようである。それ以外は基本的に6限なんだそうだ。これなら安心して同好会にも顔出し出来て、なおかつ学業も疎かにならないというわけだ。但し今日は臨時の時間設定で4時半ぐらいまでしか使えないんだそうだ。

「さてと、それじゃあマシンを出すのを手伝ってくれないか？」

「今日はバッティングか？」

「そそ。月曜はバッティング、木曜は守備をするんだよ」

「ほお……」

と言うわけで早くも俺に順番が回ってきた。

「一人20球な!!」

「わかった」

俺はそう返事をするらずは右打席に入った。

「あれ?。石井、この間僕達がバッティングセンターに行ったときは逆に立ってた気がするなあ」

「気のせいじゃないか大将?」

「そうかな……」

大正解。俺は両打ちなのだ。中学の頃に、左投げ右打ちだった俺の後輩が左でも打てるようにしてくれたのである。晴れて左投げ両打ちというわけだ。

キーン!!

「おおおお……」

打った自分でも嬉しいぐらいの鋭い当たりだった。見事に三遊間を抜けていった。それから右では長打が一発出ただけであった。両打ちと言っても基本的に俺は左で構えるから、最近はこんなもんである。

「ちょっと待ってくれ!!」

そう言うと俺は打席を変えた。この俺の行動に他の選手一同、それから橘と梅原も驚いている。

「ほらぁ!!。僕の言った通りじゃないか!!」

「お、おお…おい大将、石井の目を見てみるよ?」

「目?」

「ああ。女子に怯えてたときには思えないほど集中してるぞ」

「うん、何だか怖い顔だね…」

ズバーン!!

最初のボールを俺は勢いよく空振りした。けども、俺の空振りを見てみんな驚いている。

” 凄いスイングだ。これは…凄い、久しぶりに高野連登録出来て、しかも対戦も出来そうなレベルだ ”

この同好会の会長をしている奴はそう思っていた。名前は…神威^{カムイ}つて言うんだそうだ。凄い名字である、彼自身も中学の時に北海道から転校してきた奴なんだそうだ。

次のあたりはぼてぼてのサードゴロ。その次のあたりでようやくライット前ヒットを打つことが出来た。

” スンちゃんのフォームなんだ、必ず一発どっか出す！！”

そう思った矢先に

パキーン！！

といい当たりを打つ事が出来た。結局この一発に会長が魅せられて、俺は同好会に半強制的に入会させられた。まあ、望んでいたことだからいいんですけどね…。

「さてと、今日は早く終わったことだし…鑑賞会と行きますか？」

「おおおお！！」

「僕も早くみたいよ」

「わかったわかった。しかしまあ、ここじゃあばつが悪いから例の非常階段に行こう」

「いいよ…というか、俺はどこにあるか知らないけど」

「僕達についてくれば大丈夫だよ」

「おお」

そう言っただけで俺達がその後の宴を楽しんだことは言っただけでもないだろう…

.....

「おおお、このくびれ…いいねえ」

「いや、やっぱりこの豊満な…」

「大将も石井もいいセンスしてますなあ…このこの…！」

「やめろって梅原」

「そうだよ、男なんてみんなこうさ」

「「ははは」「」

・・・・・・・・・・・・・・・・

その所為で

「もう！！。石井先輩もににも帰ってくるのが遅いよ…！」

「す、すいません」

「美也、男には大事な時間って言うのが…」

「どおせエッチは本でも学校で読んでたんでしょ？」

「そ、そのとおりで…」

「早く二人ともお風呂に入って…！」

「「はい…！」」

そう言って俺達が家で美也ちゃんに怒られたのは言うまでもない…。

7話 初日 part 2 (後書き)

ご意見、ご質問、ご感想お待ちしておりますのでぜひお寄せください。よろしく願います。

8話 New Face

一夜明けて、今日から本格的に自転車通勤する気になった。昨日高橋先生に聞いたところ、問題ないそうだし、だけでも、今までそれで一週間続いた生徒はいないとのこと。なら、その記録に挑むしかないというわけで俺は早速実用車の後ろの荷物を置く板にカバンを置いた。重い思いをして教科書を持つ手間が省けて本当に楽だ。

「石井さん、本当に自転車で行くんですか？」

「まあね。トレーニングにもなるし、一石二鳥だよ」

「ははは。まあ頑張ってくれよ」

「橘、カバン持って行くか？。ついでに」

「えっ、いいの？」

「まあ、上物でいいよ」

俺達の秘密の暗号めいた会話。だけどそれは美也ちゃんにも筒抜けのようだ。

”むううう。石井さんといに、またエッチな本の話してる”

だけど、俺達を制止しようとはしない。諦めてるのかなあ？。

「わかった」

「よし、契約成立だ。それじゃあ、お先に…」

俺はそう言つと自転車のベルを鳴らして出発した。知り合いに会わなければいいんだけどね。朝の一時を過ごす…なんて言うのとは無縁の暑さと、湿度との闘いだ。確かにこれなら一週間持つかと疑問を抱いてしまうのも分からなくもない。まあそれはさておき、自転車を俺は快調に漕いでいった。

前もつて試運転で学校まで行ったことはあつたからそこまできつくはない。教科書は重いと言つてもたかだか数キロだからそこまで影響するものでもない。もし、野球同好会が本格的に始まつたらバットだとかグローブだとかも運ばなくちゃいけないし、これぐらいの事でヒイヒイ言っている場合じゃない。

「あ、石井先輩…！」

「え…？」

そう言われて自転車を停めて振り返ると、そこには七咲さんの姿があつた。

「おはようございます」

「あ、おはよう…」

「自転車で登校…ですか？」

「う、うん…橘とか美也ちゃんは後ろから歩いてくると思うよ」

「そうなんですか。坂の上なのに、よく自転車を使う気になりました」

たね」

「そ、そうだね…」

「…?」

やっぱり、こう女性を介するとどうしてもおどおどしてしまう。

「それじゃあお先にね」

「あ、すいませんでした」

「気にしてないから…大丈夫だよ…また後でね」

「はい!」

「そ、それじゃあ…」

そう言っていると俺は再び自転車を漕ぎ始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

”石井先輩、自転車で坂道登ってきて疲れちゃったのかな?”

・・・・・・・・・・・・・・・・

それから数分で学校に到着した。だが、どこに停めればいいのだろうか。仕方がないから、教員用の車の脇にでも停めておくことにしよう。にしてもこの車、誰のだろうか。こういうものってなかなか誰が乗っているとかって判断がしにくい代物だからなあ。

”ま、いつか”

自転車を車の脇にどさつと置くと…いやいや失礼、自転車を駐輪すると俺は校舎の中に入っていた。まるで乗務しやくとを追えて、車庫まで回送列車を運転した運転士が宿舎に戻っていくようだ。これから運転士なら、業務報告を行って休憩なり、勤務終了なりといったところなのに、俺達是不幸にもこれから勉強をしなくてはならない。

「あ、石井君！」

「おはよー！。純一は？」

「ああ…う、後ろから来るよ」

「後ろから？」

「うん。今日から自転車通学にしたんだ…。そ、それで橘の荷物を持つことになってね」

「「自転車?!」」

下駄箱に着くやすぐに棚町さんと田中さんに会ったわけだが、おかしなことに田中さんは驚いている。

「え?。ここって…自転車通学禁止なの?」

「ア、アンタこんなところまで自転車で来たの?」

「ああ。これぐらいの坂なら…」

「す、すごいんだね…石井君って」

「ああ…」

まあ、そんな事はさておき俺達は教室に一緒に向かった。俺はほつとした、もし俺が実用車なんて使ってるのがばれたら、笑われちゃうかもなあって。そんな事を思いながら俺は教室の自分の席に座った。

学校の授業というのところで、自分自身の得手不得手によって印象というか、授業に対する取り組みが変わってくるのは普通なことである。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「それで、この時の筆者の見解としては…」

”よくわかんねえなあ…漢文ならいいのに”

「…というわけで、まあこの文章が言いたいものというのが…」

”空腹でこんな授業聞かなくちゃいけないなんてまさに…地獄だ”

・・・・・・・・・・・・・・・・

やっぱり国語は苦手だ。二日目の昼前の授業、俺は散々な目に遭った気分だ。まあ次の時間の数学の授業はまだ面白いことやっただから許すとしてもイーブンにはならない。こんなこと言っても始まらないか…。

「それじゃあ今日はここまで。号令」

「起立！。礼！」

俺達が決まったかのように頭を軽く下げると先生はそれを見届けて教室を去っていった。これからはいわゆる昼休みである。

「大将、石井。折角だから一緒に学食行こうぜ」

「いいよ。僕も今日はそうするつもりだったし、石井も折角だからおいでよ」

「わかった。俺もそれじゃあ一緒にさせて貰うよ」

ここの学食は偉く人気なんだそうで……いやいや、高校が山の上にあつてコンビニとかが近くにないからここに集中するのだろう。前の学校だったら、休み時間中にコンビニに行つて買つてきている人もいたし、噂によると出前も出来たんだそうだ。さすがに出前をする先生に怒られるというのが通説だったから、真似はしなかったけど。

「うわぁ、混んでるなぁ」

見たところ、かなりの列が出来てる。まあこの時間なら仕方がないことなのだろう。とりあえず今日は俺も軽く、冷やしのかけうどんの大盛りを注文した。さすがに学食とだけあつて料金も大盛りにして3600ウォン……あ、いやいや240円とかなり安い。とりあえず3人で座れるところを探したのだが、生憎様この盛況ぶりで空席があるはずもない。仕方がないから、外のテラスで食べることに

した。ここはまだ空いてはいたが、空いているところを探すのには少なからず苦労した。

「ふう、ようやく食べられるな」

「本当だぜ、早くしないと麺が伸びちまうよ」

「それじゃあいただきます」

橘がそう言つと俺達も自分の買った食べ物をお口の中に入れた。うん…値段に見合つたおいしさがある。確かにこれなら混むのが分らない。

「あ、お兄ちゃん」

振り向くとそこには美也ちゃんと、七咲さん…それから見知らぬツインテールの女の子がいた。変に思われるから再び俺はうどんをお口の中に頬張つた。

「美也か。それに七咲」

「こんにちは、橘先輩、梅原先輩それから石井先輩」

「元気そうだな」

「ああ。ど、どうも…」

俺の反応は至つて冷淡と思われることが殆どである。冷淡になリたくないんだけど、どうしても今の俺だと冷淡になってしまう。

「ところで美也。その隣にいる女の子は？」

「ああ。紗江ちゃんだよ」

「紗江ちゃん？」

「中多紗江ちゃん。2学期から転校してきたんだ。だから石井先輩と同じなんだよ」

「なるほどな。僕は2年A組の橘純一、美也の兄だよ。よろしくね」

「俺も2年A組の梅原正吉だ。よろしくな」

「2 - Aの石井一譽です。よろしくお願いします」

「どうも。せ。先輩方…」

どうやらこの中多さんという人は極度の人見知りのようだった。後から美也ちゃんに聞いた話だと、俺と同じ2学期に女子校から転校してきたんだそう。なんでも親の仕事の都合なんだそうで…。あやかっけるとかとも言ってたけども、一体どういう意味なんだろう。おっと、大事なことを忘れていた。

「ところで橘、例の件」

「ああ、それじゃあな美也。僕達これから行かなくちゃいけないところがあるんだ」

「よし、それじゃあ大将、石井。行こう！」

俺達は梅原の一言を合図に秘密の鑑賞会に向かった。

.....

「先輩達、どこに行つたのかなあ？」

「多分、お兄ちゃん達のことだからまたエツチな本でも読みに行つてるんでしょ？。全くもう、最近は石井先輩のおかげで手口が巧妙になったから、みゃーも大変だよ」

「ああ、石井先輩って、美也ちゃん達のところに仮暮らししてるんだよね？」

「そうそう。両親が海外に行つちやつてるんだつたかな？。だからなんだ。ちよつと訳ありで、たまに声がどもつちやつたりするんだ。でもいつもは優しくて、お兄ちゃんよりも勉強が出来るからみゃーも石井先輩がいてくれて嬉しいんだけどね」

「石井先輩って、勉強得意なんだ」

「そうそう。紗江ちゃんも今度教わるといいよ。国語は苦手って言つてたけどね……」

「そうなんだ……ありがとう、美也ちゃん」

”石井先輩って勉強得意なんだ……。橘先輩は数学が得意みただけど、石井先輩は何が得意なのかな？。でも、私にはよそよそしいから教えてくれるかわかんないなあ……”

七咲さんはこの時、そう思っていたようだ。

.....

一方俺達かというと、校舎裏の人気のないところに三人で集まった。

「うひょおお。こりゃあいいなあ」

「石井とは気が合うぜ。大将はどうだ？」

「さ、最高だよ。こんなの今までに見たことがない……」

「だろだろ？。他にもまだたくさんあるぞ？」

とかつて感じに、お宝本の鑑賞会をしていた……。

というわけで俺は今自室にいる。あれから半日は駆け足のようになり過ぎ去り、時間は夜の8時半と言ったところだ。いつも通りパソコンに向かってしていると、隣ではなにやら騒がしいことになっているようだった。文句を言える立場でもないが、ドタバタといった何をしているのだろうか。

「にいにのばか……！！！」

「や、やめるんだ美也」

「マンガと間違えて、妹にエッチな本渡すってどういうこと？」

「人間にはミスがつきものだろう？」

「ううううう……！！！」

「お、落ち着け。ぎゃあ!!」

その時、橘の悲鳴が聞こえた。急いで俺も隣にある美也ちゃんの部屋に向かった。とは言っても、ノックは必ずだ。

「し、失礼します。ど、どうした？」

「あ、石井さん」

「石井、あ痛ててて…」

見ると、橘の顔には無数の傷が出来ている。それも何か鋭利なものに引つ搔かれたような傷だ。おそらく美也ちゃんがやったのだろう。まあ軽い怪我で何よりだった。

「にいにが、私に借りてたマンガと間違えてお宝本を持ってきたんです。これ!」

「あらら。これはいけませんね」

そう言われて中を見てみると…なるほどお、これは凄いなあ。

「それじゃあ俺が検閲しておくよ」

「ええええ?!。そりゃあないだろ？」

「大丈夫さ、後で返すから…」

この時、橘は悟ってくれたようだった。俺がそう言った後に、デー

タと一緒にね…」と言おうとしていたことを。すると、俺のスマートフォンが突然鳴った。メールのようだ。ああ、因みに俺のスマホ着信音はJR西日本の広島の方で使われている、接近メロディーなんですよ。主に呉駅だとかで使われています…ああ、無駄な情報すいませんでした。因みに、目覚まし時計は京阪の昔の発車ベルです…って、もつと余計な情報でしたね、重ね重ねすいません。

「誰だ？。これ…」

開いてみるとそこにはこんな文章が書かれていた。

”夜分遅くに失礼します。私、七咲です。美也ちゃんにアドレスを教えて貰いました。これからもしよろしくお願いします”

と書かれていた。七咲さんからのようだ…。

「美也ちゃん、俺のアドレス七咲さんに教えた？」

「えっ！？。は、はい。教えて欲しいって言うから…」

「そう。わかった。突然来たから、驚いちゃってね…」

「悪かったですか？」

「いやあ。別にいいよ、今日の昼に会った中多さんとかにも教えて貰って構わないからさ…」

「そうですか…」

「だけども…俺に一言言ってからになるべくして欲しいかな？。い

きなりだとやっぱり驚くから…」

「あ、わかりました!!」

「うん。ならそうしておく。橘も棚町さんとかにもし聞かれたら、そういう風に対応してくれないか？」

「わかった」

「よし、それじゃあまた後でな…」

そう俺が言うと、それまで不安そうな顔をしていた美也ちゃんも一気にスッキリした顔に早変わりした。その場が落ち着くと、俺は再び自分の部屋に戻っていった。

「ざっと…52ページか…多すぎだよ。ああ、返事返事と…」

俺はそう思いつつ七咲さんへの返信を書くことにした。

”こんばんは。これからよろしくお願いします…で、送信つと、さてと仕事仕事”

俺は早速橘へデータを送るために準備に取りかかった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8771z/>

アマガミ...新たなる出発

2012年1月9日22時02分発行